ふるさとがえり
GOING HOME

映画づくりで“心”をつなぐ
―えな『心の合併』プロジェクト―

岐阜県恵那市を舞台に制作された映画「ふるさとがえり」（林　弘樹監督）が今春公開される。映画は合併で誕生した同市の市民有志が、映画づくりによって『心の合併』を進めようと企画したものだ。プロジェクトにかかわった多くの人々の「ふるさと」への心が一つの作品となってスクリーンに映し出される。

［上］「ふるさとがえり」のワンシーン。一番右、主人公の少年時代を演じる熊崎雄大くんは、公開オーディションで抜擢された市内在住の小学４年生。［右］物語は“ふるさと”恵那の豊かな自然をバックに展開していく。真ん中が、主役の渋江譲二さん。

恵那市は04年10月に6市町村（＊）が対等合併して誕生。合併後、まちづくり活動などが進められてきたが、なかなか一体感が生まれてこなかったという。

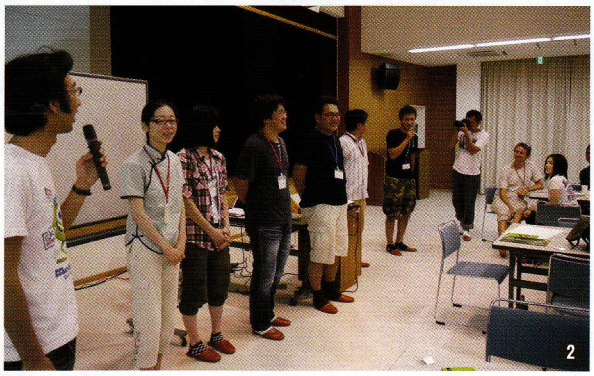
そんなとき、一人の自治体職員が〝映画制作によるまちづくり〟に出会う。企画や運営などのプロセスに多くの市民を巻き込みながら映画を制作していくことを通じて、市民の交流やつながりを育んでいこうというものだ。思い立った職員が愛媛県西条市などで市民参加型の映画を制作してきた林弘樹監督を訪問したことから、恵那の映画づくりが始まる。

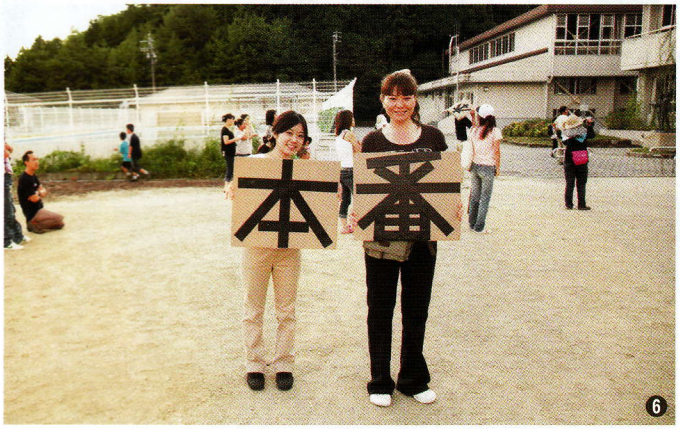
07年6月、当時、商工会議所青年部会長だった小板潤治さんを代表に、市民有志が「えな『心の合併』プロジェクト（えなこころ）」を発足。プロジェクトの周知や制作費集めなどの本格的な活動を開始する。映画塾やチャリティーコンサートの開催、1000人近い市民からの応援メッセージも盛り込んだ予告編の制作と上映…。当初10人ほどだったメンバーはいつしか100人を超えるまでに広がった。それでも予算の確保は難航し、撮影開始は予定より1年遅れた。

昨年春に脚本が完成。タイトルは「ふるさとがえり」――。都会から恵那に戻ってきた主人公が地域での暮らしや幼なじみとのかかわりの中で「ふるさと」や「絆」を再発見していくストーリーだ。

脚本を手がけた栗山宗大さんは、「単に恵那をPRしたり、『ふるさと賛歌』

＊恵那市、岩村町、山岡町、明智町、串原村、上矢作町





①10年5月の制作発表会。左から林弘樹監督、小板潤治さん、栗山宗大さん。②“えなここ”では林監督や栗山さんを招き映画塾などを開催。そうした市民との交流の中から物語のエピソードなどが生まれた。③市内のイベントなどでは映画づくりへの協賛などを積極的に呼びかけた。④物語の核となる消防団活動のシーンには、市内の消防団員が延べ1300人参加している。⑤現場での炊き出しなどは市民ボランティアが担った。朝食で出されたおにぎりは3000個以上！。⑥市民のほか大学生もボランティアとして参加。プロスタッフを支えた。

や『ふるさとの悲哀』を描いたものでもない。『ふるさと』の未来をつくり、そこで生きていくために、普遍的な視点からみんなで『ふるさと』を見つめ直し、語り合えるような作品にしたかった」と物語のコンセプトを話す。

映画には、主人公役の渋江譲二さんをはじめ、有名俳優陣がプロジェクトの趣旨に共鳴して出演。その一方、公開オーディションの合格者や、エキストラなどとして多くの市民も出演している。さらに物語で重要な役割を果たす消防団活動の場面には、市内の消防署・消防団が全面的に協力。延べ約1300人の消防団員が参加した。撮影は昨年8月末～9月。炊き出しや撮影スタッフの身の回りの世話、エキストラや撮影場所の手配など〝えなここ〟のメンバーを中心に多くの市民ボランティアが裏方として支えた。

映画は間もなく完成。4月下旬の恵那でのロードショーから公開を開始する。その後、岐阜県内や全国に展開していく予定だ。すでに地域上映会の依頼も舞い込んできている。また、海外の国際映画祭にもエントリーするという。

〝えなここ〟副代表の伊藤収三さんは、「ようやくここまで来た。でも映画ができて終わりじゃない。みんなの心をつなげていくのが目的だし、映画はそのためのツール。映画を通じて全国に恵那を発信しながら、みんなが誇りのもてる〝ふるさと〟にしていきたい」と力を込める。

本誌／三海　厚
【全国自主上映問合せ先】映画製作会社 FireWorks　Tel&Fax：03-3900-4836

えな「心の合併」プロジェクト▶ http://enakoko.com/